

令和5年度 第9回末野原地域会議 会議録

■日時 令和5年12月20日(水) 午後7時から8時45分まで

■場所 末野原交流館 2階 多目的ホール

■出席者 委員 : 15名

事務局(上郷支所): 近藤支所長、小船担当長、鷹見主査

■次第

1 会長あいさつ

2 第8回地域会議の会議録について

3 協議事項

(1) 地域会議ふりかえりシートについて

(2) 今後の地域会議について

(3) 令和6年度地域課題解決事業について

4 答申

(1) 市長あいさつ

(2) 答申書提出

(3) 答申内容についての意見交換

別紙

「令和5年度 第9回末野原地域会議
会議録(答申関係)」

5 報告事項

(1) 上郷地域バスについて

(2) R6わくわく事業審査会について

6 事務連絡

■議事(要約)

1 会長あいさつ 省略

2 第8回地域会議の会議録について

・第8回地域会議の会議録の内容確認を行い、了承を得た

3 協議事項

(1) 地域会議ふりかえりシートについて

・地域会議ふりかえりシートについて事務局から説明した

(2) 今後の地域会議について

・第10回及び第11回の地域会議の開催について協議し、開催しないことを決定した

(3) 令和6年度地域課題解決事業について

・令和6年度から実施する地域課題解決事業(交通安全事業)について、事務局から説明した

・交通安全啓発の具体的なアイデアについて意見交換を実施した

(意見)

・すえのはら縁 joy サロン等の高齢者が集まる場を活用し、動体視力トレーニングを実施(自身の能力を知る機会づくり)

- ・りすくらぶ等交通安全活動団体と連携した交通安全啓発
- ・交通安全ハイキング（まちを歩いて危険箇所を確認する）
- ・電柱巻き看板のデザインの公募
- ・こども園園児への啓発品に中高生のアイデアを取り入れる
- ・小学生の通学時の見守り活動にドローンを導入する
- ・自身のドライブレコーダー映像を分析し、運転技術を省みる
- ・ヒヤリハット体験データをカーナビに反映させ、カーナビにより注意喚起をする
- ・交通安全関連の技術等を集めた大きなイベントの開催

4 答申

別紙「令和5年度 第9回末野原地域会議 会議録（答申関係）」参照

5 報告事項

次の事項について、書面により報告した
（1）上郷地域バスについて
（2）R6わくわく事業審査会について

◆次回会議開催等

◇第12回地域会議

と き：令和6年3月21日（木） 午後7時から

と ころ：末野原交流館2階 多目的ホール

※第10回及び第11回地域会議は決議により開催中止

令和5年度 第9回末野原地域会議 会議録（答申関係）

- 日時 令和5年12月20日（水） 午後7時40分から8時40分まで
■場所 末野原交流館 2階 多目的ホール
■出席者 委員 : 15名
太田市長
企画政策部：辻部長
企画課：野依課長
都市計画課：今村主幹
地域振興部：中川室長
末野原交流館：玉田交流館長
<事務局>
上郷支所：近藤支所長、下川副支所長、小船担当長、鷹見主査

■次第

- 1 市長挨拶
- 2 答申書提出
- 3 答申内容についての意見交換

■議事（要約）

1 市長あいさつ

諮問では28の地域会議に直接訪問したので答申も直接いただきました。答申が12月と1月に集中しているため今日のように会場移動で時間を調整することになり申し訳ない。限られた時間だがしっかり意見を聞き議論を深めたいと思う。

2 答申書提出 省略

3 答申についての意見交換

委員： 総合計画に将来の都市像「つくる・つながる・暮らし楽しむまち とよた」とあるが、何をイメージしてどういう豊田市にしたいと思っているか、市長の考えを知りたい。

市長： かつて豊田市の総合計画の将来都市像は「産業文化交流都市」であった。それは自分自身は産業文化に関心はなくても市民の皆さんは“市が目指す産業文化交流都市で暮らしてください”という方向性だった。しかし、今は「つながる・つくる・暮らし楽しむまち とよた」となった。これは市が目指す街に合わせ自分が生きていくのではなく、自分が自分らしい生き方をするために街があるということである。市民のみなさんが自分らしく暮らし続けるために、いろいろな人と繋がることによって暮らしをもっともっと楽しめる、それを目指しているのが第9次豊田市総合計画の将来都市像である。

豊田市は第8次豊田市総合計画（2017年）からこの将来都市像を使っている。2008年を境に時代が成熟社会へ移行する中で、豊田市の将来都市像を市民の皆

さんの暮らしを指し示す“産業文化交流都市”ではなく、“一人一人の思いを汲み取るまちづくり”へと変化させたのが第8次豊田市総合計画であり、第9次豊田市総合計画も変わらず引き継いでいる。

私達にとって繋がる社会というのは地域コミュニティそのものではないだろうか。地域コミュニティに日常的に繋がることができるかどうかが大切だと考えている。ところが、新型コロナウイルス感染症による行動制限等で地域社会が変化し、コロナ前では自然に受け入れられていた自治会への加入や行事への参加の意識が3年半の間に変化してしまった。子ども会の縮小や高齢者クラブの参加者減少等、自治区や子ども会、高齢者クラブの求心力がなくなったとすると「繋がる」そのものが危うくなり個人の世界に閉じこもらざるを得ない。そのため、「繋がる」ことで新しいことが生まれ暮らしが楽しめるような地域社会、豊田市としてのまちづくりのいろいろな仕掛け、自治区への関わり方の転換が必要であると実感している。

委員： その考えをぜひ計画の中に表していただきたい。諮問時に示された資料の内容では抽象的でわかりにくいと感じる。ぜひ、豊田市に住みたいと思えるようなまちづくりをしてほしい。

委員： 市長の言葉は良く理解できた。繋がることの大切さについて話されたが、一人一人の市民の尊厳や価値を守りながら繋がるのが大事だと思う。

高齢者クラブが無くなるのは働き手が増えたのも原因ではないだろうか。働けることが立派だと思う反面、国民年金のみでは物価高騰等に対応しきれず暮らしていけないという現実もある。安心して生きていけないと生活を楽しめないと思う。では若い人は幸せかという若者も非正規が多く貧困である。豊田市で家を持ちたくても費用が高くあきらめてしまう。

社会活動家である湯浅誠さんの著書によると、3つの溜めがあると人は死なないそうである。一つ目はお金、金銭の溜め。二つ目は相談できる人がいるといった人間関係の溜め、3つ目は生きる力、精神的な溜め。しかしコロナ禍でこの3つともを無くしてしまった人もいると聞く。

このような社会で、現在は自分だけが良ければいいと思う人が増えてきており、地域でのボランティアや人のために何かしようと思う人は少ない。細々とでもいいからみんなが繋がり、楽しく生きていけるまちになってほしいと思っている。

市長： コロナ禍や2008年のリーマンショック、2011年の東日本大震災等大きな経済事件や自然災害が起こるたびに若い人たちの意識の変化を感じる。

旭地区に移住した若者と話す機会があり、どのような生活をしているかと聞くと「百姓」だと言った。それは農業のことではなく、100の仕事（役割）を持つと言う意味であった。その仕事のリストを見ると現金収入だけでなく農作物の物々交換や地域のボランティアも含まれていた。そんな話を聞いて現金だけで暮らすのではない生き方を模索し始めている若者が増えているのではないかと感じている。

その若者と同じ生き方が末野原地域でできるかという難しいかもしれないが、暮らし方、繋がり方の工夫の余地はあるのではないだろうか。農作物の物々

交換や、畑が無ければ山村の農家と繋がり一緒に農業をして農作物を得る、又は人間関係の中でお金には代えられないサービスを提供する等、繋がり方によって可能性が生まれると信じたい。

また、今回の諮問に対する他の地区の答申内容を見ると、地区によってさまざまな議論がされている。その中で内容が抽象的すぎてわかりにくい、カタカナが多い、もっと伝わるようにしてほしいと言った指摘をいただいております、見ていただいたところは共通していると感じている。

末野原地域会議からの答申の中で大型ショッピングセンターがないとあるが、他地区に住む私から見ると末野原地域は生協が近くていいなと思う。旧町村地区の意見交換の際に人口減少の話があり、自分の子どもが地区外へ出ていくかどうかを聞いたらほとんどの方が手を挙げた。しかし、出ていく先は旧豊田市かと聞くと同じくらいの方がまた手を挙げた。自分の地区から遠くない距離へ出ていく事が果たして人口減少と言えるのだろうか。中学校区単位で考えると生活が完結しないが、広い目で見ると同じような場所で家族の移動がされている。そのような見方から末野原地域は生協が近くていいと思うのである。

豊田市は伝統的にコミュニティ行政（中学校区単位）を実行しており、良い面もあるが、逆に中学校区単位で考えすぎてしまう弊害もあると思う。特に子ども達と話をするとき大人が「この地区には大型ショッピングセンターはない」と言うと子供は自分の地区をマイナスなイメージで覚えてしまう。中学校区単位で生活が完結しないと満足できないという状況に拘らずもっと広域で考えても良いのではないだろうか。図書館や美術館は豊田市に1か所しかないが中学校区に1つないといけないとは思わないだろう。だから広域で考え、周りにあるものを無理なく受け止めることができればよいのではないだろうか。

委員： 子ども達は名古屋や岡崎へ買い物に行き、魅力的な買い物ができる施設は豊田市にないと言う。答申書には書かれていないが、地域に愛着を持つどころではなく、もう少し人を外から集めるところに重点を置いた施策ができないだろうかと思い意見した。若い人が外へ出てしまうのは損失だと感じている。大型ショッピングセンターが必ずしもいいとは思わないが、外から人を惹きつけ、人を呼び豊田市でお金を落としてもらうことも大事だと思う。

市長： 豊田市というのは難しい所があり、地元をあまり評価しないという特徴がある。そごうや松坂屋で物を買わない。物を買わないと撤退してしまうのだが、ずっとそれを繰り返しているように思う。地元で消費を行わないことによりどのような影響を受けるのかといった考えがない。

例えば、豊田市は農業の街でコメの収穫量は愛知県1位である。品種で言えばミネアサヒの評価は特Aをもらっており品質も良い。しかし市民のみなさんがその米を買うかということそうではない。豊田市内で農業をやり良い作物を作る、その商品を積極的に買うことでその農家が生活でき、農地を維持し守ることができる。そのようなサイクルが理想なのだが地元の品を買い支える、自分の地域の産業や農業を応援することが自分達の生活に跳ね返ってくるという考えがないのである。買い支えると言うことで豊田市の中の経済が廻り、土地も守られていくということも暮らしの中で意識してもらえると何か変わる気がする。

委員： 豊田市は地域の特産を活かして豊田の農産物をブランド化することのデザイン力、発信力が足りないと思う。地域を盛り上げる術はお金だけではなく、地域の人々の知恵である。蒲郡市の竹島水族館は良い例で末野原地域も農産物をブランド化して外から人が訪れるようになると良いと思う。また、物、施設だけではなく、末野原地域のみで使える地域通貨があるとかそういった取組が子ども達にも波及して地域に住むことの誇りを持つことができるのではないかと。

市長： 末野原地域はお茶の産地だがみなさんは日常的に抹茶を飲んでいるだろうか。茶畑の景色は末野原に残したい景色か又はどうでもいい景色と考えるか。買い支える、残していくとはそういうことである。

委員： 私達の住む豊田市はミクロの視点だが、日本全体の視点から豊田市をみてみてはどうだろうか。少子化の問題を豊田市で解消できれば全国的に注目され豊田市に人が集まり活性化するのではないかと考える。

市長： 少子化に歯止めをかけるのは地方都市では困難である。非正規雇用者が増加し、ワーキングプアの若者が増えている中で結婚という選択肢ができるだろうか。結婚をするためには働かなければならず、働くと結婚が遅くなる。結婚が遅くなると出産も遅くなり子どもの数も増えない。この構造が地方都市レベルで変わるものではない。地方都市では、子育てしやすくなるよう支援をするしかなく少子化に歯止めをかけるのは難しいと感じている。国策で若い人たちの収入が増え結婚できるような状況を作る、又はフランスの準結婚制度のように結婚制度そのものを変えなくては難しいだろう。

また、男性が変わることも大事である。子育て世代の男性が子育てに関与し、男女同じように子育てに参画する。また、子育ての終わった地域の人達が子育てに関わり高齢者が子育てを手伝う。そのような地域社会ができることで子育てがしたいと思う人が増えるのではないかと。そのためには男性の働き方を変える理解を企業がしっかりと示し、制度を変えていく必要がある。社会全体が変わることで結婚しやすく子育てしやすい、さらに高齢者の活躍の場もできて一石三鳥となるのではないかと。

意見交換終了